
座敷童子って知ってる？

時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

座敷童子って知ってる？

【Nコード】

N5201BA

【作者名】

時雨

【あらすじ】

座敷童子って知ってる？

家に住んでる昔風の女の子とか男の子とか。

僕、その子を“学校”で見ちゃったんだけど・・・

いきなりだけどさ、座敷童子って知ってる？ 家に住みついでる子供みたいな子。僕は五〜六歳位だと思う。着物とか着ててさ、家に悪戯したりするんだって。でも座敷童子がいると、家に幸福が訪れるって感じの話もある、妖怪って言うより、精霊みたいな何でそんな話するの？

僕、それに似てるの見ちゃったんだ。

ええ！？ 凄いな。お前の家、幸せになれるんじゃない？

いや、僕が見たのは僕の家じゃないんだ。あれってさ、“家”だけに居る存在なのかな？

え？ さあ・・・座敷童子だって、他の所にも行きたいかもしれないし・・・

座敷童子って、“学校”にも、居るのかな？

もしかして、僕たちの学校で見たの？

うん。あれは、放課後のことだったんだ・・・

あれは、放課後のことだったんだ。僕、いつもみたいに居残り勉強させられてたの。それで、四時ぐらいになっちゃったんだよ。ランドセル背負って下駄箱出たら、もう夕暮れみたいになってた。横の方に、校庭見えるでしょ？ 遊具の中に鉄棒あるじゃん。そこにさ、一人の女の子がいたの。おかつぱ頭で、赤い着物。ちゃんちゃんこって言うの？ 昔の格好した、ちっちゃい女の子。僕、びっくりしてその子をじーっと見ちゃったんだ。そしたら、女の子も僕に気付いて、こっちに來たの。

「ねえねえ、お兄ちゃん。我ね、我ね、行くところがあるの」

「へえ、どこ行きたいの？」

「我ね、あのね、この近くにある、栗ヶ原小学校に行きたいの」「結構近いけど、一人で行ける?」

そう聞いたら、女の子がふるふると首を振って、

「我ね、ずっとこの学校に居たからね、道が分からないの。お兄ちゃん、一緒に行ってくれる?」

「うん、良いよ」

僕の家って、栗ヶ原小の近くでしょ? だから、一緒に行くことにしたんだよ。行く途中で色々聞いたんだ。

「君、名前は?」

「我ね、お紅って言うの」

珍しいって言うか古い感じだなあって思ったんだけど、ちっちゃい子って自分の名前の一部でいたりするじゃん? モモとか、ユリ、とか。コウの入った名前なのかなと思ったんだけど。

「お紅ちゃんか。ずっと貝野崎小に居たの?」

「うん。ずっとずーっと居たの。でも、もう居られなくなっちゃった」

少し悲しそうにそう言ったんだ。引越してもするのかなって思ったから。道は結構短いから、そう言うどうでもいい事話してたら着いたんだ。校門の前で別れた。

「お兄ちゃん。貝野崎の校長先生に伝えて欲しいの!」

「うん?」

「『長いことお世話になりました』って、伝えて!」

「分かったよ。じゃあね！ お紅ちゃん」
「さようなら！」

こう言ってお紅ちゃんは学校に入っていったんだ。僕も普通に帰った。

次の日学校に来てさ、一番に校長室に行ったの。

「校長先生。お紅ちゃんって子、知ってますか？」
「うん・・・？ お紅ちゃん、お紅ちゃん・・・」
「赤いちゃんちゃんこ着て、おかつぱ頭の女の子なんですけど」

僕がそう言ったら、校長先生滅茶苦茶びっくりした感じで、僕を見たんだ。

「そ、その子がどうかしたかね・・・？」
「え？ もうこの学校に居られないから、栗ヶ原小に行きました。先生に『長いことお世話になりました』って伝えてって言うてたんです」
「で・・・出ていったのか・・・？ 座敷童子のあの子が・・・！」

校長先生はしどろもどろになって、怯えてる感じになったんだよ。僕も驚いて、

「どうしたんですか？ お紅ちゃんが出てっちゃ行けませんでしたか？」

校長先生はいかにも決心したって感じの、真剣な顔で話してくれた。

「お紅ちゃんは・・・あの子は座敷童子だ。居ると幸福をもたらす。

だから、あの子がいたからこの学校の近くには大きなマンションが
たち、児童数も一気に増えた」

「へえ……？ 凄いですけど、おとぎ話みたいなやつじゃないで
すか？」

校長先生が本気で言ってるのが変だった。うるたえて、怯える。

「しかし、座敷童子が出ていくという事は、何か良くない事が起こ
る……。それも、とんでもなく禍々しい、恐ろしい出来事が……
！！」

「先生……？」

「どうしたんだろう。校長先生、そんな話を本気にして……
でしょ？ でもさ、あれから校長先生いっつも怯えてるよ
ね。」

「……そういえばお前知ってるか？ 保健の先生、重病で
長期休暇。音楽の先生、事故ったって……」

「お紅ちゃんが居なくなってから、か？」

「お紅ちゃんが居なくなってから、だ。」

「……いつかは僕たちも……」

「やばいかも、知れないな。」

(後書き)

どうでしたか？

自分では、書いてる間ずっとしましたが・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5201ba/>

座敷童子って知ってる？

2012年1月14日12時46分発行